

TO GO for 統合！ ふるさと川原を未来へつなぐ

1 はじめに

本校は、令和6年度に近隣の2校と統合し、新小学校となり、さらに令和9年度には校区の中学校が移転し、施設一体型の小中一貫校となる。まさに、今、新たな未来に向けての人づくり、ふるさとづくりが望まれる。学校の再編統合を伴う小中一貫教育の推進には、その意義を保護者や地域に示し、共に新たな学校づくりを進めていくことが大切である。子供たちが「ひと・もの・こと」に自ら関わっていく学習を通してふるさと川原への愛着を深めるとともに、様々な交流を通して、希望をもってふるさとの未来を創造していこうとする子供の育成を目指して取り組んだ。

2 活動の実際

(1) ホンモノに学ぶ～異世代交流～

川原の財産は、人と人との豊かで温かいつながりだと感じている。現在、様々な方面で地域の方と共に活動しており、子供たちにとって大変有意義な学びとなっている。統合後もこのつながりを大切にし、さらに広げていくため『川原おたから人材バンク』を作り、登録をお願いした。現在、手芸や読み聞かせ、器楽指導等で登録をいただいている。異世代交流は、人を手本とし、生き方を学ぶ機会となっている。

◆ 弥栄節踊り講習会

高西中校区には、鋳物発祥の町ー金屋町がある。古くから『御印祭』という祭りと共に『弥栄節踊り』が伝わっている。この踊りは、校区の4小中学校の運動会で披露されている。毎年、弥栄節保存会の方が子供たちに教えてくださり、それをさらに上級生から下級生に教えている。中学生になると、弥栄節の歌を歌い、琴の演奏に合わせて踊りを踊る。御印祭前夜祭では、老若男女入り交じって街流しに入る。校下の保育園でも踊りを練習し、保育園から小学校へ、小学校から中学校へ、そして大人へと伝統が息づいていることが感じられる。保存会による、教員のための講習会も充実しており、地域全体でこの弥栄節踊りを大切にしていることがうかがえる。



＜弥栄節保存会による講習会＞



＜運動会での全校弥栄節踊り＞

◆ 能楽クラブ

川原校区には、能楽を継承する方がおられ、クラブ活動で指導していただいている。子供たちが日本の伝統芸能に触れるまたとない機会となっており、地域活動への広がりもみられる。校下公民館での講習会に参加し、瑞龍寺の薪能での発表に向け練習を行うなど、伝統文化の継承に貢献している。



＜クラブ活動＞



＜公民館での能楽教室＞

◆ 高岡銅器に挑戦！ ～第6学年 ものづくり・デザイン科

平成18年に高岡市で『ものづくり・デザイン科』がスタートし、各学校では、学校や地域の特色を生かした授業を展開している。川原小学校の外観や運動服は、高岡銅器をイメージした青銅色があしらわれるなど、高岡銅器とのつながりは深い。

校区には雅号をもつ職人さんの工房があり、高岡銅器の歴史について聞いたり、実際に工程を見学したりすることができる。本校では、職人さんに教わりながら、本物の銅を使って銅鐸や鋳物絵の制作に取り組み、工房でガス型を作ったり、金吹きの工程を見学させていただいたりした。熱く溶けた銅（ゆ）は1200℃を超え、職人さんの本気度をまざまざと見せつけられた。職人さんのものづくりへの思いにも触れることで、仕事への姿勢や情熱等、生き方を学ぶ貴重な場となった。



＜銅器制作のオリエンテーション＞



＜ガス型作り＞



＜職人さんによる金吹き＞

◆ 人と人とのつながり～真心を込めて～ 第5学年 総合的な学習の時間

5年生は、ふるさと川原を支える人づくりのために、総合的な学習の時間に積極的に地域と関わる取組を行った。コロナ禍のため、福祉施設の訪問はできなかったが、高齢者疑似体験を通して、社会では、人と人との支え合いが必要であることを感じ取った。自分にできることは何かを考え、公園のゴミ拾いやデイサービスの手伝い等、子供たち自らが考えて決めた活動に取り組んだ。夏休みの課題として継続的に取り組んだことで、家族や地域の方から認めてもらうことができ、自己有用感の高まりがみられた。さらに、社会福祉協議会からご協力をいただき、認知症サポーター養成講座を実施した。地域の一員としての自覚が高まり、お年寄りに積極的に関わっていきたいという感想を抱いていた。



＜高齢者疑似体験＞



＜認知症キッズサポーター任命＞

◆ ぼく・わたしはフラワーボランティア ～第3学年 総合的な学習の時間

本校の校舎前庭に小さなハーブ園がある。毎年、3年生がハーブ農家の方と一緒に栽培し、ハーブを活用した活動に取り組んでおり、夏になると、花壇からとてもよい香りが漂い、他学年も集まる自慢のハーブ園となっている。この活動では、ポプリやスワッグを作ったり、ハーブティーやハーブカルピスを飲んだりすることで、ハーブが自分たちの暮らしを潤してくれることに気付くことができた。自分たちが大切に育てた自慢の

ハーブで作ったハーブティーは格別だったようだ。ポプリを自分の子供のように大切に育てる農家さんとの活動は、人やものと真剣に関っていく姿勢を学ぶことができた。



<ハーブの観察>



ヘスワッグづくり



<ハーブティー おいしいな>

◆ ぼく・わたしのまちで見つけた ～第2学年 生活科

2年生になった子供たちは学校生活にも慣れ、生活範囲が広がり始める。遊びに行った友達の家近くにあるお寺や神社等に興味が沸き、それぞれの地区に自慢の場所があることに気付いていく。そこで、校区にある自慢したい事柄や、自分が好きな場所等を調べて紹介し合い、川原校区をもっと好きになろうと、町探検を行った。お寺で和尚さんから話を聞いたり、鐘を撞かせてもらったりした。また、公民館では主事さんから公民館の役割を聞かせてもらったことで、夏休みに足を運ぶ子供がみられた。高岡市でただ一つの可動橋である内免橋を実際に見学し、災害の備えについても話を聞くことができた。地域のために働く人々と実際に触れ合うことで、自分たちが様々な方から守られていることに気付くことができ、また、川原のよさを実感することにもつながった。



<どんなことをしておられますか？>



<どんな人が来るのですか？>



<橋はどんなふうにもちあがるの？>

◆ わたしがこどものころ戦争があった ～卒業生による講演会

昨年、本校に一冊の本が届いた。県外在住の本校卒業生の方が小学校一年生の頃に書いた絵日記がもとになっており、戦時下の様子が子供目線で書かれている。ぜひ、母校にと送ってくださったので、全校児童に紹介して図書室で閲覧できるようにし、HPでも紹介した。その後も交流が続く中、再来年で閉校と知るところとなり、これまで多くの小学校等で講演活動をされており、集大成として、母校での講演が実現した。平凡にも感じる今の暮らしがいかに幸せかを感じる機会となった。戦後78年、その頃の話聞くことがだんだん難しくなってきた。「戦争を知ることは平和を知ること」という言葉に、平和への思いを強くした。



<一緒に校歌を歌う>

◆ 講演会『ホンモノ』に学ぶ～多くのなぞが眠る南極へGO！

自分の夢や目標を実現させ、輝く人に出逢うと、魂が動かされる。「ホンモノ」に出

逢うことで、これまで遠く離れたところにあったことが、自分事にかわり、引き寄せて考えようとする。子供たちのそういった姿を願い、第54次南極観測隊に同行された方をお招きしてお話をうかがった。実際の映像を見たり、岩や氷を触ったりすることができた。また、南極の話だけでなく、経験に基づいた生き方や夢についてお話しいただき、子供たちの感動は現実味を増し、夢や可能性を広げられたのではないかと感じた。



＜南極での生活について質問＞

(2) とともに夢を～高西中校区連携S(西) K(川原) Y(横田) プロジェクト～

統合に向け、3校で一番大切にしているのは、子供たちが夢や希望をもってわくわくした気持ちで出逢うこと、そして、子供たちが主体となり、新しい学校、更にふるさとを創っていくことである。そういった姿を願い、今年度から子供たち同士の交流活動を大切にして取り組んでいる。教員間での連絡、相談がスムーズに行くよう、学年や分掌ごとのチームをつくってリモート会議を行い、カリキュラムを横断させながら、子供たちが見通しをもって活動できるようにしている。本年度はまず、どの学年も年度当初にリモートで自己紹介や学校紹介を行った。コロナ禍だったこともあり、リモートで最大限に自分たちのよさや川原のよさを伝えるという意識で臨んでいた。



＜なかよしリモート交流＞

◆ 第1学年 生活科「みんなで秋みつけ」

1年生は、活動を共にすることを大切にし、秋みつけを一緒に行った。3校混合グループで、オリエンテーリング方式で実施した。古城公園の豊かな自然の中で、子供たちの心も次第に打ち解けていった。初めて会う他校の友達と仲良くなれるか、最初は不安な子もみられたが、協力して問題を解いたり生き物を観察したりする活動は、自然と交流が生まれ、相手のよさにも気付くことができる大変有意義な交流となった。新しい友達ができることや多くの友達と学べることに期待感をもって統合を迎えられるように、周りの大人がサポートすることが大切だと感じた。



＜自然となかよしビンゴ＞

◆ 第4、5学年 音楽交流会

これまで実施していた区域連合音楽会がコロナ禍を機に見直された。そこで、3校の交流活動として音楽交流会を実施することとした。各校それぞれの合唱・合奏を聴き合い、自他のよさを認め合うことができた。また『合唱の高西中』といわれる中学校の音楽科教員から講評をいただき、中学校への夢を膨らませた。



＜練習の成果を発揮する＞

◆ 第6学年 連合運動会に向けた合同練習会

6月の連合運動会に向け、3校の6年生が城光寺陸上競技場に集い、合同練習を行った。練習の質がぐんと向上し、子供たちの心構えも一気に引き締まった。

「あんなふうには走れるといいな」「ハードル走はもっと練習しないといけないな」など、今後の課題や目標をもって帰校した。連合運動会当日は、同じ学校の仲間のように声をかけ合う姿がみられた。小学校の段階から交流を重ねていくことで、滑らかな小中連携が期待できる。



(3) ちがいは豊かさ～思いやりの心を育む異学年交流～

本校は各学年 20 名前後の単級で構成され、気心の知れた関係性の中で安心して活動できるよさがある。また、活躍の場が多く、自己有用感や自己肯定感も高まりやすい。反面、人間関係や関係性が固定化する、多様な価値に触れる機会が少ないなどのデメリットもある。そのため、本校では、日常的に関わる縦割り清掃をはじめとした異学年交流の場を、よりよい地域社会づくりに貢献できる人づくりの基盤と捉え、新たな気付きや学びが生まれるように意識して取り組んでいる。

◆ 入学を祝おう

『入学を祝う会』では、縦割り班に分かれ、古城公園でオリエンテーリングを行った。コロナ禍を経て三年ぶりに復活した行事で、下級生を思いやる上級生の姿や、上級生に感謝し、憧れの眼差しで見つめる下級生の姿から、年齢が違ふからこそ生まれる互いの思いやりが感じられ、よき伝統が脈々と受け継がれていることを再認識することができた。



＜1年生自己紹介タイム＞



＜縦割りオリエンテーリング＞

◆ 考えの交流 1～3年生による合同道徳

子供たち同士が様々な考えや価値観に触れる機会として、3学年合同道徳を実施した。『犬との触れ合い学習』を各学年で実施した後、感じたことについて振り返りを行った。触れ合い学習では、相手の気持ちを分かろうとすることや人間と比べて寿命が短い犬も精一杯、楽しく生きているということなどについて多くの気付きが生まれた。道徳の授業では、全体、グループと形態を変えながら、思いやりや命の大切さについて考えた。考えや発表の仕方、聞き方等、それぞれに学びがあった。今後も学年の枠を超えた意見交流の場を大切にし、相手を尊重しながらよりよい自分を目指して追究していけるようにしたい。



＜犬が先生になる＞



＜話し合いは3年生がリーダー＞

3 まとめ

現在、子供たちが統合で出逢う仲間や様々なことにわくわくできるよう、3校が力を合わせて取組を行っている。大切なのは、人と関わることが楽しいと感じられる子供を育成すること。3校の子供たちが、希望と誇りをもち、それぞれの小学校で学んでよかったと自信をもって統合小学校へ進めるよう、今後も全力でサポートしていきたい。